
キン肉マンレディ?世

超人カットマン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キン肉マンレディ?世

【Nコード】

N0488Y

【作者名】

超人カットマン

【あらすじ】

かつての戦いから数十年が経過し、地球に悪行超人が現れ、正義超人達が全滅させられる。

そんな中、キン肉星女王の血を引き、ある人物と同じ魂を持つ超人が現れた。その名は「キン肉マンレディ?世」

お供のミート、仲間の新生代超人とともに悪行超人を懲らしめる戦いが始まる。

ファイト1 キン肉マンレディー? 世登場の巻

数十年前

彼は、みなより少し離れた場所での後継を見ていた。

「万歳!!」

「レディー女王万歳!!」

今日この日、即位することになったキン肉星王女の姿を見ようと、多くの人々が集まり一本の道を構成し、道の真ん中に花を投げたり拍手を送っている。

その道を一步一步優雅に歩く彼女は、これまでのような無邪気さの無い、立派な王者の風格を持つ女性となっていた。

(王女、即位おめでとう御座います)

笑顔で周囲の人に手を振る彼女を見た彼は、そのままある場所へと去って行った。そして、

「なに? 自分を超人保存装置プリザードカプセルに入れろだど?」

かつての知己に頼み込み、自身を以前と同様に後の未来まで今の状態で保存することに決めた。その知己からは、

「いいのかよ! その中に入ると、再び蓋があくまで永遠に出られない。遊ぶことも勉強することも、恋も結婚もできないんだぞ。」
と言われたが、彼は意見を変えなかった。

「正義超人の戦士をサポートするのが、僕の人生です。」

彼はそう言い残し、いつ目覚めるか分からない眠りについた。

そして……しばらくの時間が経過する

現在

「え？ええええ！」

一人の少女が装置に触れると、扉が開き凍えるような冷氣と共に一人の男が現れた。

「この星に正義を取り戻すため、僕の力が必要なのですね。その声にお応えしましょう。」

かつて二人のキン肉マンの力となった伝説の超人マネージャー「アレキサンドリア・ミート」が蘇ったのだ。

「あわわわ、だ、誰なんですかあ？！」

ミートの前の少女は腰を抜かしているようだ。改めてその少女を観察したミートは、思った。

（また変わった恰好の娘だな）

東洋出身らしく髪は輝く黒髪で腰あたりまで伸ばしており、両方の同じ位置に赤いリボンをつけている。

顔立ちからはまだ幼さが感じられ、目はかつて仕えた姫と同じく真紅。特に特徴的なのは服装で、オレンジとクリーム色の合わさった、一昔前の女性僧侶とファンタジーアニメの魔法少女のローブを合わせたような服を身に着けている。

「初めまして、あなたは超人ですね。僕はアレキサンドリア・ミートと申します。」

目の前の少女をなるべく刺激しないよう、なるべく優しい声でミートはあいさつした。

「アレキサンドリア：ミート？何かで聞いたような。」

少女はいくらか警戒心を解いたのか、落ち着き始めた。

「ところで、あなたの名前はなんですか？」

ここでミートは肝心な事を聞いた。

「私ですか？私はキン肉マンレディー、と言っても母が同じ名前だから、皆からは「？世」とか「マンタロー」と呼ばれています。」

少女は座りなすと、礼に則った挨拶をした。

「キン肉マン：レディー？」

ミートはその名を聞いた途端、過去の記憶がよみがえり、

「顔、よく見せて。」

と言って、少女の頬を持って顔を見回して。

(全然似てない)

と、思った。しかし今はそんな事を気にしている場合ではなく。

「ところで？世、あなたは何故ここ美波理公園へ来たのですか？」

と、？世に聞いた。先代と区別をつけるため「？世」と呼んだ。

「そうそう、これですよ！これ！！」

？世はこう言うと、持ってきた鞆の中から新聞を一部取り出していた。
った。

「これ、悪行超人にアイドル超人全滅ってあるでしょう。私はこれに抗するために地球に来たんです。ニュージエネレーション新世代超人として。」

？世は意気込みながら言った。しかしその後、

「つていうか、なんで私が東京、しかも公園勤務なんですか。私は沖縄に行きたかったのに。」

違う方向を向いてブツブツぼやきだした。

その時、地面に何か固くて大きい物が落ちてくる音が響いた。

二人が外に出ると、腹に×マークの金属製の突起物が付いた筋肉隆々な女が現れた。

「見つけたぞ、我らが仇敵キン肉マンレディーの娘、キン肉マンレディー？世。キン肉族王家の血筋は危険だ、このボーン・キラーが即刻排除する。」

ボーン・キラーはこう言うと、？世めがけて腹の突起物を発射した。
「ちよつと！先制攻撃？」

？世は身軽な身のこなしで次々と攻撃をかわした。

「ええい、チョコマカと！！」

ボーン・キラーはふと、近くを歩く幼い少女を見つけた。ボーン・キラーは高速移動で少女を捕まえると、

「キン肉マンレディー？世、この子が殺されなくなったら大人し
くなさい。」

と言った。しかし、

「だから何？殺したいんなら勝手にしたら。大体その子捕まったのだって、こんな時間に塾に行くわけでもないのに出歩いているその子が悪いんだから。」

完全にシラけた口調でこう言った。

「？世、あなたには失望しましたよ！！！」

ミートは？世にこう言った。かつてのキン肉マンレディーは、他人のためなら自分のことも犠牲にできる人物だったが、今回の彼女は先代とは違うようだ。

ボーン・キラーも、ミート同様？世の言い方に最初は啞然としていたが、抱えている少女がやたらと騒ぐため頭に來たらしく。

「あなたは黙ってなさい！！！」

と少女に言っ、彼女の頬を叩き彼女の足元に落ちていた棒飴を踏みつぶした。

「あ、ああああ。」

少女にとっはとてもショックだったらしく、今にも泣きそうな表情になっている。

「なんて酷いことを…」

ミートがこう呟いた途端、自分の近くから途轍もない殺氣を感じた。「あなたさ、超人：いえ人間としてしてはいけない二つのこと、分かってる？」

この時、？世の口調が変化していることに氣が付いたのは、ミートだけだった。

「だから何？私とやる氣になったの？ボーンクラッシュクロス！！」
ボーン・キラーはこう言う、？世めがけて腹の突起を發射した。
しかし？世は、これを右手の人差し指で受け止め、拳の果てにはデコピンの容量で行った攻撃で、ボーン・キラーの突起物を粉々にしてしまった。ミートはこの時、彼女の額に薄くではあるが「肉」の文字が浮かび上がっているのを見た。

「やってはいけない事はね、まず女の子に乱暴すること。」

？世がこう言った途端、電源ボタンを押したテレビの画面のように

消え、気づいたときには彼女の拳がボーン・キラの頬に当たっていた。

「凄い、あんな距離を無呼吸でゼロにするなんて。」

ミートはこの時、彼女は先代を上回る実力者かもしれない、と思った。

「そして二つ目は、食べ物で粗末にすること！」

次に左アッパーで、ボーン・キラを天高く打ち上げた。

「あなたはその二つを一度に行ったの、死んでも殺されても文句は言わせない。」

？世はこう言くと、ボーン・キラめがけて飛びあがり、五所蹂躪固めの形に持って行った。

「あの技は、48の殺人技の一つ、筋肉バスター！」

そしてそのままの体制で地上へ向けて落ちていき、地面に勢いよく着地した。この一撃でボーン・キラの体には五か所の致命的なダメージを受け、倒れた。

ボーン・キラを倒した？世は、踏みつぶされた棒飴を拾うと、不思議な台詞を呟きながら飴をさすり始めた。すると、粉々になった飴が見る見るうちに元通りになった。

「はい、あなたみたいに小さい子がこんな夜中に散歩いちゃ危ないですよ。」

優しい表情で少女に渡した、

「お姉ちゃん、ありがとう。」

笑顔の少女を見たミートは思った。

（基本的な性格はともかく、根本的な部分は変わらないのですね）

そして余談ではあるが、少女がこんな時間に出歩いていたのは、昼間に学校で大怪我をして病院に運ばれた友人の見舞いに行くためだったという。しかし、学校から終わってすぐに習い事があったため、この時間になってしまったらしい。持っている飴は、その友人の好きなものだという。

その後、同じ飴がその子の元に届いたが、それはまた別の話である。

ファイト1 キン肉マンレディー?世登場の巻(後書き)

超人紹介

キン肉マンレディー?世

(イメージCV 早見沙織)

(元になった人物 キン肉万太郎)

キン肉星女王となった初代キン肉マンレディーの娘。ただし父親似。悪行超人对策として地球の美波理公園にやってきた新生代超人。仲間からは母親と区別をつける為「?世」や「マンタロー」と呼ばれている。

原作のキン肉マン?世と違い割とまともな為、訓練校でも成績は序列六位をマークしている。本来は沖縄地方の防衛にあたるはずだったが、さる事情により東京の公園駐在になっている。

超人強度は97万パワーをマークしており、母親譲りの怪力の持ち主。絞め技や投げ技より格闘技を好んで使い、火事場のおっぱい力はもちろん、ある超人命名の「火事場の狂暴化」という特殊な力を持っている。

ファイト2 ガゼルマンガール登場 VS アナコンダ

ここは太陽系第三惑星、通称「地球」この島国「日本」の中央都市「東京」田園調布にあるさる公園では、なにやら微妙な光景が繰り広げられていた。

「違いますよ？世、そんなかわし方では次へ繋がりませんよ。」

頭にトサカのある小柄な少年が、黒髪の少女にプロレス技をかけているのだ。

「じゃあこれでどう！」

少女は技をかけられている右腕を使ってエルボー攻撃を繰り出そうとした。しかし、

「ダメですよ！関節技を無理やりはずそうとすれば、よけいに相手にペースを握られますよ。」

トサカの少年は少女の腕を柱に回転すると、腕を使って首をロックした。ちなみにこの二人はとても特殊な訓練を受けています、よい子も悪い子も絶対真似してはいけません。

（やはり、女王レディー様のようにには行きませんね）

少年は技を受けている少女を見ながら言った。

（さて、そろそろ解放してあげますか）

少年はこう思うと、

「今日は終わりですよ？世。」

と言って技を解いた。

「あーもう！またミートに勝てなかった！」

今日も今日とて相手の少年に関節技で負けた少女「キン肉マンレデ

「イー？世」は木を蹴りながら言った。

「いいですか？世、プロレスは総合格闘技であってムエタイやボクシングと違うんです。ただ格闘技の技術があるだけではこれからの戦いには勝てませんよ。」

今日のスパーリングの相手をしたミートは、淡々とした口調で？世に言った。

「それはそれでいいじゃないですか！関節技なんてかかる前に出させなければいいんですから。」

？世はこう言った、しかし、

「でも、僕の関節技を阻止できないようではそれは夢のまた夢ではないですか。」

先ほどの口調を変えずにミートは言った。

「そういう言い方はないでしょう。」

と？世が言うと、

「仲がいいのね、お前たち！」

？世の近くの木の上から声がした、そこにはガゼルの角を模した角のついたカチューシャを付け、全体的に茶色のコスチュームを身に着けた少女が居た。

「調子はどう？マンタロー？」

「ガゼルマンガール、その呼び方はやめてよ。」

木の上から見下ろす相手に、？世こと「マンタロー」はこう言った。

「あの？世、知り合いですか？」

これまで会ったことが無い相手なので、ミートは？世に訊ねた。

「ああ、この娘は私と訓練校の同期で、名前はガゼルマンガール。正式な東京駐屯の新世代超人よ。」

？世は嫌な相手を紹介する口調で説明した。実際に嫌な奴であり、？世は彼女の事を「タンザニアの鬼」だの「ちゃいろいろいくま」だのと呼んでいる。

「んで？仮にも一番栄誉ある東京防衛中のあなたが、美波理公園防衛の私に何の用？」

「そういう言い方しないでよ、私とあなたの仲でしょう。」

憚ることなく嫌悪感を示す？世だったが、ガゼルマンはそんな事を気にせず馴れ馴れしくしている。

「あなた達ちようど二人だし、これいらなかなと思って。」

そう言ってガゼルマンは、服のポケットの中から小さい紙を二枚取り出した。

「今をときめく超大物歌手、中華娘のコンサートのチケット二枚。もらったはいいけど余っちゃって、あなた達どうかなって。」

「ふーん、で、何が目的？」

相変わらず嫌悪感バリバリの？世は、懷疑の念を持ってガゼルマンを見ている。

「別に、何もないよ。」

ガゼルマンは飄々とした口調で言った。その後、貰わないなら半券だけ取って捨てちゃうと言っていたので、息抜きにミートと二人で行くことになった。

そして、コンサート当日である日曜日。二人は秋葉原にある劇場へと赴いた。その道中、

「ねえ、ミートって確かお母さんが前に東京にいた時に召し抱えられていたんでしょう。お母さんは割と小皺とか増えてきてるのになたは殆ど見た目変わってないけどなんでなの？」

ミートに疑問に思っていたことを聞いてみた。

プリザードカプセル

「超人保存装置に入っていたおかげですよ。そのおかげ今僕はこれまでの若さのまま第二の人生を歩めるのだから。」

と、ミートは？世に答えた。そしてその後も色々な昔話を聞きながら歩いていくうちに、件の劇場にたどり着いた。

入口でチケットを提示し、指定された席に座りながら待つこと数分

後、ブザーが鳴り劇場の明かりが消え、舞台の中央にチャイナドレス姿の女性が現れた。この人がこのコンサートの主役「中華娘」である。年齢的に娘は無理があるだろう、と思う観客やファンもいるが気にしない。

「みんなー！今日は私のコンサートに来てくれてありがとうアル！」

中華娘が客席に向かいこう叫ぶと、ファンクラブ会員の客からは、中国語で「どういたしまして」の意味になる「不客氣」という言葉が上がった。

「それじゃあ今日もいくアルよ、まずは…」

一方その頃、舞台袖では、

「グハ！」

「うわああああ！！」

大勢の舞台裏スタッフや警備員が、突如何者かに襲撃され次々と倒されていった。

「じゃあこのまま、次の曲にいくアルよ！」

舞台では、現在舞台袖で起こっている事態に気づいていない中華娘が、次の曲の披露しようとしていた。

客席で見えていた？世は、少し回りを見回した後、

「ねえミート、私のど乾いたからジュース買ってくるね。」

と、言い残し席を立った。実際はおトイレにいくのだが、

そして舞台上でも、予想もしない事が起こったのだ。中華娘のマネージャーが舞台に現れたのだ。それもおぼつかない足取りで、

「マネージャー、どうしたアル？」

思わず中華娘は訊ねた。この手の職業についている人間のもっとも基本でもっとも重要なのは、イベントの邪魔にならないこと。本来伝えたいことがある場合、舞台袖の観客から見えない場所から合図を出すものである。一体何があったのかと思ったのだ。

その瞬間、思いがけないことが起こった。マネージャーの口から異様に長く、先端が二つに分かれた舌が飛び出し、今まさに出口に向かっていている？世を捕らえ、舞台上へと連れてきたのだ。

「な、なんのつもりアル!!！」

と、中華娘に訊かれたマネージャーは、

「まったく、ここも随分警備やチェックがあまいのう。」

と言うと、自ら顔を握り潰し、機械でできた長い体を現して言った。

「新世代悪行超人アナコンダが、お前の命を頂戴しにきたぜ！」

「キャアアア!!！」

「なんでここに悪行超人が？」

突然の出来事に、会場は騒然となった。

「？世!!！」

ミートはすぐに？世の元に駆け付けようとしたが、突如舞台上に降りてきた柵に阻まれ、舞台上に上がれなくなった。

「一体何用よ！」

首に巻きついた舌を外しながら？世は言った。

「決まっているだろ、例え雑魚超人であってもお前は初代キン肉マンレディの娘、始末するに越したことはない。」

そう言うアナコンダは自分の尾を一振りした。？世はそれをかわすと、

「こうなったらやってやります!!！」

と叫ぶと、アナコンダの胴体部分めがけて飛び蹴りを放った。しかし、自由自在に体の長さを変えるアナコンダはそれをなんなく回避

し、

「魔女鞭の鞭打ち!!」

尾を使って?世に連撃を浴びせた。

「あのままじゃ?世が。」

柵の外から様子を見ていたミートはこう思った、その時である、

「そこまでよ!」

自分の隣に、以前見た茶色いコスチューム姿の少女が現れた。

「私は新世代正義超人、東京防衛役ガゼルマンガール。アナコンダだったかしら、その子を放して大人しく出てきなさい。」

ガゼルマンは柵の前でアナコンダにこう叫んだ、しかし、

「うるせえ!こいつを始末してから遊んでやる!!」

アナコンダは尾を槍のように使ってガゼルマンを突き飛ばした。

「ガゼルマンさん!!」

ミートは思わずそちらに駆け寄っていった。

「喰らえ!蛇道監禁囲い!!」

邪魔者は突き飛ばしたアナコンダは再び?世に向かっていったが、

「楽勝紅脚!!」

油断していたため突然飛んできた飛び蹴りを喰らい、大きくふっ飛ばされた。

「いい加減にするアルよ。」

蹴りを放ったのはステージ上にいた中華娘であった。

「ほう、今の蹴り、俺たちにやられてまだ懲りてないようだな、ラーメン娘。」

アナコンダの一言で、会場にいた多くの人物は驚いた。

「え?じゃああなたはお母さんと同じ正義超人のラーメン娘さん?」
中でも?世の驚きは最たるものだったらしく、戸惑いながらも本人に訊ねた。

「別に黙っていたわけじゃないアル。」

ラーメン娘は?世にこう言うのと、?世に語りだした。

「私は以前、金のためならどんな汚い事だってしていた時期があっ

たアル。その時にアイドルをしたらいいと言ってくれたのが、お前の母親アル。」

そして、今助けたのはその時の恩返しのもりだ、と言った。

「フン！ババアが何を話している。」

アナコンダは尾でラーメン娘をふっ飛ばした。それを見ていた？世は、

「ラーメン娘さんはただのババアじゃない。立派な正義超人の戦士よ。」

と、厳しい口調で言った。その時、彼女の額には「肉」の文字が浮かび上がっていた。

「そうよ！それに！」

すると、柵の外からも声がした。先ほどふっ飛ばされるも、すぐさま復活したガゼルマンである。

「新世代悪行超人って随分な臆病物ばかりなのね。私との対戦が怖いからって柵まで立てて拒否しやがって。」

と、侮蔑を込めた口調でアナコンダに言った。

「なんだと！もう我慢ならねえ、今すぐ始末してやる！」

アナコンダは今の言葉に怒ったようで、？世の元を離れてガゼルマンに向かっていった。

「カチューシャバインド！！」

ガゼルマンは大量のカチューシャを取り出し、アナコンダめがけて投げつけた。カチューシャはアナコンダの体にはまり、動けないように拘束した。

「今よ！カチューシャを踏み台にして頭まで駆け上がれ！」

ガゼルマンの言葉を聞いた瞬間、？世は素早くアナコンダの頭まで駆け上り首を捕らえた。

「フン！いくら首を捕らえても落下できなければ意味はな…」

その瞬間、変に体が浮く感じがした。見ると、ラーメン娘が尾を引っ張りアナコンダの体を宙に浮かべたのだ。

「やってやるアル！キン肉バスターを！」

ラーメン娘の言葉を受けた途端、？世の額の肉の文字が光り輝き、
？世は凄いスピードで落下した。

「グフアアア！！」

技を受けたアナコンダの体は、粉々に砕けた。その瞬間、観客席から盛大な拍手が飛んできた。

その様子を見ていたミートは、

「？世、それが友情パワー、あなたのお母様達の力の源です。」
と思った。

その後、？世がラーメン娘から関節技や固め技の指導を受けたが、それはまた別の話。

ファイト2 ガゼルマンガール登場 VSアナコンダ（後書き）

超人紹介

ガゼルマンガール

（イメージCV 植田佳奈）

（元になった人物

ガゼルマン）

東京に駐屯する新生代超人。キン肉マンレディー？世とは訓練校の同期。

原作同様、訓練校を主席の成績で卒業しており、体のしなやかさと強靱さは健在。

頭の角はカチューシャで再現されており、いくつもスピアを持っている。取り外して武器として使用するばかりではなく、拘束具や足場として使用できる。

ラーメン娘^{ニャン}

（イメージCV 林原めぐみ）

（元になった人物

ラーメンマン）

今では伝説超人^{レジェンド}の一人に数えられているアイドル超人。かつては金のためなら残虐行為も行っていたが、初代キン肉マンレディーの一言でアイドルを始め、今では予想を遥かに超える人気ぶりとなっている。

得意技は「キャメルクラッチ」で、その他にも「五十歩百歩神拳」「楽勝紅脚」といった拳法技を持つ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0488y/>

キン肉マンレディ?世

2011年11月6日16時20分発行